

【図書紹介】

安原義仁、ロイ・ロウ著
『「学問の府」の起源
——知のネットワークと「大学」の形成』

(知泉書館、2018年)

中村 勝美

(広島女学院大学)

本書は、同じ著者により2017年にラウトリッジ社より出版された *The Origins of Higher Learning: Knowledge networks and the early development of universities* の日本語版である。ただし、本書の「まえがき」にもあるように、厳密な翻訳ではなく、英語版の内容に基づきつつ日本の読者を念頭に書き下ろされたものである。

著者の一人である安原義仁氏について改めて紹介する必要はないだろう。近代イギリス教育史、とりわけイギリス大学史の専門家である。ロイ・ロウ氏はウェールズ大学スウォンジー校教授、ロンドン大学教育大学院客員名誉教授、イギリス教育史学会会長を歴任したイギリス教育史研究の泰斗であり、高等教育に関する研究も数多く著している。日本の研究者と親交が深く、退職後は幾度も来日されているので、本学会会員のなかにも知遇を得た方々が少なくないのではと推察する。

本書は、大学史研究に造詣の深い日英の研究者による共同研究の成果であるが、メソポタミアからギリシア、ローマ、インド、中国、朝鮮、日本、ベトナム、イスラーム世界まで全10章からなる目次を見ると、著者がたった二人であることに驚きを禁じ得ない。本書の企画は、ロイ・ロウが発案し、安原氏に持ちかけた「まえがき」にある。評者も折に触れて、安原氏本人からロイ・ロウの(かなり強引な)誘いを断り切れず、このプロジェクトに巻き込まれたと伺ってきた。しかしながら、本書を一読して感じたのは、中山茂先生の『歴史としての学問』(中公叢書、1974年)、横尾荘英先生の『中世大学都市への旅』(朝日選書、1992年)など大学史研究会に連なる一群の研究と同じ旅情である。両氏の関心は元々かなりの部分、重なり合っており、二人の真の共同作業なくしては、けっして生まれなかった一冊であろう。

本書の根底にある問題意識は、「人類はいつ、どこで、どのようにして知の探究への旅に出立したのか。体系的な知の探究が行われた「学問の府」(seat or centre of higher learning)にはどのようなものがあったのか。古代・中世文明圏に存在した「学問の府」相互間の接触・交流はどのようなものだったのか。ある文明圏から他の文明圏への知の移転はいかにしてなされたのか」(3頁)というものである。

ユーラシア大陸の端から端までの地理的広がり、古代ギリシアから中世まで数世紀に及ぶ「学問の府」を巡る旅へ二人三脚で乗り出した二人の知的好奇心には、ただただ驚嘆するばかり

である。このような壮大なテーマと展望を持つ本書を紹介することは、正直なところ筆者の能力をはるかに超えているが、本書の概要と特色について紹介したい。

序章では本書の目的が語られる。本書が明らかにしようとする課題は次の3点である（11頁）。

1. 中世ヨーロッパ大学誕生以前、古代・中世文明圏における「学問の府」の実態と特徴の解明
2. 長期間にわたる地球規模での学問の起源に関する歴史地図の素描
3. 諸文明が交易のみならず、知識の伝播・移転や交流によっても相互関連性・つながりを持っていったことの解明

この基本的問題意識に基づき、各章において、①「学問の府」設立の背景・条件、②設立にかかわった人々の動機・目的、③「学問の府」で探究された知識の種類、④知識の伝播・移転が明らかにされる。

第1章では、古代メソポタミアとギリシアからローマ、ビザンティン帝国に至る地中海世界の学問の府の諸相が描き出される。この時代の学問の府は、プラトンのアカデメイアやアリストテレスのリュケイオンに代表される学塾・私塾であり、プトレマイオス朝のアレクサンドリアである。学塾が口頭での知識の伝達に優れているのに対し、文字文化の発展とともに探究された知識を保存・伝達するための組織形態として、図書館が発展する。アレクサンドリアに国王をパトロンとする学問の研究センターとして創設された図書館は各地の学者を引き寄せた。

第2章では、古代インドの文明が取り上げられる。古代インドにおける知の探求と伝達は、宗教と深く結びついており、仏教の普及・発展とともに仏教の寺院・僧院がその重要拠点となった。ただし、僧院では仏教だけでなく、バラモン教やヴェーダ、論理学や数学、医学などの世俗の知識も探究されていたという。海洋と山脈という自然の障壁により、他の文明世界と隔てられていたにもかかわらず、インドへの交易ルートは海陸ともに早くから開かれており、「海の道」を通じて東南アジア諸国へ、またシルクロードを通じて中国へと仏教を中心としたインド文化の伝播・移転が行われた。

第3章は古代中国文明である。諸子百家の出現と斉の稷下学宮、五経博士、太学の創設、科挙制度の勃興にいたる歴史と、儒学が中核学問として確立された過程が描かれる。中国では、国の統治・行政にあたる官吏を養成する必要から官学が主流であったが、メリトクラシーに基づく官吏登用試験である科挙の成立以降、学校教育は相対的に地位を低下させていく。中国文明のもう一つの特徴は、西域やインドからの仏教の伝播、唐の長安の国際都市としての繁栄といった事象に関わらず、中国の学問・教育の根幹が世界の他の文明とは独立した形で形成されたことである。

第4章では、中国文明から多大な影響を受けた東アジア文化圏（韓国・北朝鮮、日本、台湾、ベトナム北部）が取り上げられる。これら諸国と中国は、冊封体制と呼ばれる君臣関係を結び、漢文、儒学、仏教、律令制を共通の文化・制度として共有した。漢文は、東アジアにおける国際共通語であった。中国における紙の発明はこの文化圏への知の移転を容易にし、筆記試験制度を普及させる要因ともなった。

第5章から7章までの3章では、イスラームが扱われる。イスラームは古代ギリシア・ローマと古代インド、古代中国の中間地点、すなわち東西双方の文化の影響を受け、それらを吸収する

絶好の地理的条件を備えた地で勃興した。古代ギリシアの文明移転は、「シリア・ヘレニズム」、「アラビア・ルネサンス」、「一二世紀ルネサンス」の3つの段階を経ている。ギリシア文明の遺産に古代インドの文明を融合・発展させ、11世紀にその頂点に達したアラビア学術は、イスラーム世界の拡大に伴い西方ヨーロッパに移転していく。大量のギリシア・アラビアの学術文献がラテン語に翻訳されるという一大翻訳運動は、アラビア語、ギリシア語、ラテン語、ヘブライ語という多様な文化圏に生まれ育った多数の学徒が、多様な宗教・民族の共生を認めた寛容な多言語社会において、新たな写本や師や同志を求めて広く旅したことによって可能となったのである。

第8章では、中世大学の誕生が描かれる。中世大学のカリキュラムの中核を形成するアリストテレスをはじめ、法学、医学のテキストの多くは一二世紀ルネサンスの翻訳運動を通じてラテン語に翻訳されたものであった。

本書の特色の一つは、古代・中世文明圏を「学問の府」の形成と「知識の伝播・移転」という視点から読み解き、文明論および知識の社会史に新たな貢献をなしたことだろう。イスラーム世界と西洋世界はとかく分断したものと観念されがちであるが、イスラーム文明が地球規模での学術の発展において果たした役割が改めて強調されている。

終章では、本書の課題についての整理がなされている。文明圏によって濃淡はあるものの、「学問の府」成立の歴史的条件、類型、設立の動機・目的、知識の伝播・移転についての記述は明快である。しかし、本書の課題として挙げられた二つめの「長期間にわたる地球規模での学問の起源に関する歴史地図の素描」についてはどうだろうか。本書の結論では、今日の「学問の府」の起源である中世大学とは、ヨーロッパ中世大学固有の組織形態と、古代ギリシア・ローマに発祥し、(古代インドと)イスラーム世界を経由して伝播した知識・学問内容により成立したことになる。東アジア、東南アジアに紙幅を割いていることが本書の最大の魅力である一方、東アジア文明圏が羅針盤や紙の発明以外で、この壮大な「歴史地図」にどのように位置づけられるのか。著者の文体はきわめて抑制的だが、これだけの地理的・時間的な旅を経てこそ見えるものについて読者に示してほしかった。

本書は、若手研究者や高校教師も読者として想定したとのことである。英語版よりも図版が多く採用され、文献案内もあり、良心的な価格設定であるが、専門用語と人名が多数登場し、300頁超を読み通すには多少の忍耐が必要である。しかしながら、読後には高等教育史・大学史研究における新たな視座を獲得することができる。中世大学以前、世界中に知の探究拠点が存在し、相互に交流していた。ヨーロッパに誕生した中世大学に制度的起源をもつ今日の大学は、その知的伝統の上に移植されたものである。古代・中世の遺産は各文化圏での大学制度の受容にどのような影響を与えたのだろうか。

現代の大学からは、組織形態、知識・学問内容のいずれにおいても、中世大学の面影は失われつつある。純粋な知的探求にとどまらない21世紀の学問の府を生き抜く若手研究者に、ぜひ手に取っていただきたい書である。